一日一題

共に勤しむ

AMDA理事　難波　妙

AMDAがモンゴルで眼科事業を開始したのは、2010年。最初は、旧日本軍とソ連・モンゴル軍が衝突したノモンハン事件（1939年）の関係者に白内障手術を無償で実施した。

その前年、初めて会ったある女性医師は、表情一つ変えず頭ごなしに「何しに来たのか」と聞いた。そして「単に白内障の手術数だけを事業実績とするなら帰って」と私に言い放った。これがブルガン医師。彼女の鋭い眼光が私を突き刺す。私の思い上がった「善意」は拒絶された。

「他国による白内障支援事業で、医師は手術だけして帰った。患者を集めさせられたが、術前術後のケアは全くなし。こんな自己満足な事業を『支援』とする団体なら国連の資格を持っていてもお断り」と、にべもない。

ブルガン医師の祖母はモンゴル初の眼科医。祖母と彼女の共著である眼科の専門書は、今も多くのモンゴル眼科医のバイブルとなっている。「モンゴルの眼科」を世代を超えて支えてきたのだ。だからこそ、偽善的事業は我慢ならなかったのだろう。

「AMDAは、モンゴルの医師に手術をしていただきたいと考えている。それが患者にとって一番安心に決まっているから」と私は答えた。

白内障手術は無事に終わった。涙ながらに感謝する患者さんに、私はブルガン医師と2人でもらい泣きした。その後は子どもの眼科健診の大切さを訴え続け、昨年9月にはついに保健省から「子どもの目の日」が正式に発表された。こうして約7年にわたり、共に勤（いそ）しんできた。彼女は現在、保健省眼科部門のトップだ。

「勤しむ」という言葉の美しさについて、国語学者の故金田一春彦先生の講演で拝聴した。「この言葉には、働くことを喜びとする感性がある」と説明されたように記憶している。ブルガン医師は私に「共に勤しむ」喜びと手応えを自らの姿勢でもって教えてくれた。

2018・7・10